

知財ドラマ
「それパク」
特別コラム

初めての「それパク」 生田スタジオ訪問記

会員 西野 卓嗣

生田スタジオ

3月末のある日、日本テレビ（以降は「日テレ」と称します）のプロデューサーの誘いがあって、川崎市多摩区にあるよみうりランドの近くの生田スタジオを訪問し、撮影現場の見学と台本の打ち合わせをしてきました。いつもは日本弁理士会の事務所から見える汐留の日テレタワーで打ち合わせをしていたのですが、生田スタジオに行くのは初めてでした。

日テレタワーは32階建てで、四隅を巨大な恐竜の尻尾のような鉄塔で固められている特徴的なビルです。中には事務所や生放送の報道・情報番組や一部のバラエティ番組が制作されているテレビスタジオがありますが、ドラマを撮影する大きなセットが入るスタジオはないようです。

そこで、ドラマは大きなセットを設置できる生田スタジオで撮影されるのだそうです。

その日、私はまだ暗いうちに神戸の自宅を出て、地下鉄、新幹線、東横線、南武線を乗り継いで京王稲田堤駅から日テレのシャトルバスに乗って、昼前によく生田スタジオに着きました。その生田スタジオは住宅街の中にあって、その敷地は満開の桜の木で覆われていました。

私が先ず驚いたのは、その大きさです。テレビをご覧になった方はお分かりだろうと思いますが、広くて高い巨大な空間に、北脇や亜季それに高梨部長等がよく出てくる事務室や研究室などのセットが、すっぽり入っていました。

そのセットに足を踏み入れた私は、天井が高く広い古色蒼然とした事務室の雰囲気や昔懐かしさを覚え、同行してくれたプロデューサーに思わず「これセットですか？」と聞いてしまったほどでした。

事務室の傍に設けられた研究室のセットには、いろいろな実験器具、分析装置もおかれ、その中でウロウロしている俳優さん達をみると、ほんとにどこかの企業の研究室かと見まごう程でした。私はそんな研究室のドアの前で入ってもいいのかと躊躇していると、同行のプロデューサーに「セットですから遠慮なく入ってください」と言われてしまいました。

また、その隣には亜季の自室のセットがあって、デスクの上には知的財産権に関する書籍などが立ててあり、なかなか居心地がよさそうでした。

ただ、立派な壁も裏を見たら薄いベニヤ板でした。やはり、と思いました。

撮影現場

セットへの入口の手前に、俳優さんたちが時間待ちをする待合室があって、そこで何人かの出番を待つ俳優さんやスタッフが休んだりうろうろしたりしていました。そこで彼らをよく見ると、俳優さんたちは夫々あらぬ方向を向いて小声でブツブツ言っているのです。よく聞いてみるとそれはセリフのようでした。私は、なるほどそうやってセリフを覚えているのかと感心しました。それはその部屋だけではなく、撮影の合間をぬってどこでもブツブツと。

そして、その部屋の片隅に扉のないコインロッカーのようなものがあって、区画されたそれぞれに、藤崎亜季、北脇雅美、又坂市代…などとメインの登場人物の名前が記されていました。そこには小さなバッグや靴などの小物が置かれていて、出番がきた俳優さんが、撮影現場に行く前に自分の小物をもって撮影に臨み、終わったら元へ戻す、ということになっていたようでした。これなら失くさないでいいと、思いました。

私もその待合室でボーっとしていると、小柄で可愛い女の子が私の前に走り寄ってきて「よろしくお願ひします」とべこりと頭を下げたではないですか。その子こそ、主役の俳優の芳根京子ちゃんじゃないですか。感激しました。

その後、私は、リハーサルや撮影本番の状態を見せてもらうために、プロデューサーについてもう一度セットの中に入ったら、多くのスタッフが何やら忙しそうにしている、ちょっと近寄りたがたい雰囲気でした。

そんな中で監督を中心に各俳優さんがリハーサルをしていました。監督は手ぶり身振りで各俳優にいろいろと指示を出していました。一つのシーンを撮るのに、俳優さん自身が自らの意志で、また監督の指示で何度も何度もやり直していました。

リハーサルが一段落した段階で、100人以上いると思われるセットの中で、私を案内してくれているプロデューサーが、全員の前で突然「今回監修をさせていただいています弁理士の西野先生です。」と紹介されました。エーっと思ったら、続いて一言挨拶してほしいと言われました。心の準備が全くできなかったので何を言えばいいのかかわからず「皆さんよろしくお願ひします。日本弁理士会も大いに期待していますので。」と言うのが精いっぱいでした。

生田スタジオの中に社員食堂のようなものがあって、俳優さんもスタッフとまじりあって昼ご飯を食べていました。カレーライスが250円程度だったと思います。私もそこでご馳走になりました。

俳優さんたち

その後、当日撮影に来ている俳優さんのうち主要な人たちに紹介されました。主役の芳根京子ちゃんとは挨拶が済んでいたの、準主役の重岡大毅さんに紹介されました。私が「聞いたこともない単語がいっぱい出てきて大変でしょうね」と言ったら、やはり彼は「そうです、なかなか難しいです」と答えていました。そこで、「私もなるべく覚えやすいセリフを心掛けているのですが、あまり砕けると不正確になってしまいますのでね」と言ったら、納得したというような顔をしていました。ホントに納得してくれたかどうかはわかりませんが。

次に、特許事務所の所長役のともさかりえさんに紹介されました。彼女は研究員役の俳優たちと雑談をしているようでした。プロデューサーが「こちらが本物の弁理士さんです」と私を紹介してくれたのですが、彼女はそれには反応せず、私を見て「おしゃれですね!」と言ってくれましたので、すかさず「これが私の仕事着です」と言ったら、周りの俳優さんとともにワーッ!と言ってくれました。彼女はなかなかフレンドリーでした。

亜季の先輩の研究員役の朝倉あきさんは、ドラマの役より素の方が素敵に思えました。その白衣姿はテレビで見る以上に美人だし、オーラというよりも静かで雰囲気のある女優さんでした。彼女には個別に紹介はされなかったのですが、私の前を通るときにちょっと会釈をしてくれて、それがとても自然でいい感じだったことを覚えています。一気にファンになりました。

また、渡辺大知さん、福地桃子さん、豊田裕大さん、諏訪雅さんも才能あふれるこれからの映像産業を担う俳優さんたちだと思いました。

ただ残念だったことは、私が見たいと思っていた赤井英和さんは、その日撮影がなかったようでスタジオには来ていなかったことでした。

そして最後に、これが問題なのですが、常盤貴子さんに私を紹介してもらいました。プロデューサーが「こちらは神戸から来られた弁理士さんの…」と紹介してくれたのですが、その時彼女はニコっとしてこっちを見つめ「今夜はお泊りですか」と聞かれたのです。その瞬間私はその魅惑的な瞳に魅了され、やっとのことで「あのう、今夜神戸に帰ります」とあえぎながら言うのが精一杯でした。金縛りにあったようで、ともさかさんへの対応と同じようには全くできませんでした。

撮影本番

私の記憶の限りですが、撮影現場には、1カメラから6カメラまでテレビカメラが6台あって、複数のカメラで、同じ俳優さんを同時に異なる方向から撮影しているのです。ですから、各カメラマンはひたすら同じシーンを撮影し

続けているのです。それじゃ画面の切り替えはというと、スタジオとは別にある副調整室と聞いたような気がするのですが、そこで監督もしくは彼の指示によって画面の切り替をする人が操作していました。ですから、カメラマンはあとで内容が編集されたモニターを見ないと、自分が撮影した場面のどこが採用されたかがわからないのだそうです。

監督はというと、その別室から俳優さんにはスピーカを通して撮影現場に直接指示を出し、スタッフにはイヤホンを通して何やら俳優には聞こえないこともいろいろと指示をしていたようでした。

俳優さんにもよりますが、本番では何度も何度も繰り返してセリフを言うのですが、なかなかOKが出ない人もいれば、一発でOKが出る人もいます。やはりセリフの内容が日頃聞きなれているか、そうでないかも大きく影響しているのでしょう。監修者として、その点からも台本の段階でしゃべりにくいと思われる知的財産用語をできるだけ平易に「翻訳」しなければと思いました。

監修作業をしているときは、職業病かもしれませんが、ついより正確にとダラダラと赤ペンを入れてしまいますが、後で台本を読んで、俳優さんはこれを暗記してこのまましゃべるのだ、と思うとぞっとします。

しかし、ドラマでは、重岡大毅さんが慣れない知的財産用語もすらすらと口からスムーズに出ていて感心しました。さすがに俳優はすごい、とここでも感心しました。

帰りに脚本家の丑尾健太郎さんと重岡大毅さんが、下りのエレベータまで見送ってくれました。そうしたら終始私の傍にいたプロデューサーが、「すごいですね準主役や脚本家が見送りに来るなんて」と言ってくれました。少しうれしくなりました。

一階の玄関口でエレベータを降りたら、目の前に黒塗りの車が止まっていたので、私がとぼけ半分に「あの車に乗るの？」と聞きました。そうしたら、彼は駐車場の片隅を指さして「堤稲田行きのあのマイクロバスで、10分後に発車するので乗って待っていて下さい」と言いました。私も当然わかってはいましたが。

そのマイクロバスに乗って発車を待っていたら、なんと、常盤貴子さんが専属のスタイリストとヘアメイクを連れて玄関から出て来るではないですか。彼女らがこちらを振り向くこともなく、その黒塗りの車に乗って走り去るシーンを、私はドラマを見ている感覚で見送りました。

私は、生田スタジオから、また南武線、東横線、新幹線、神戸の地下鉄を乗り継いで帰宅したら夜中になっていました。東京で降っていた雨は、神戸に着くころには星空になっていました。ながーい、ながーい刺激的な1日でした。

と、ここまで書いたところで、第5話と第6話が放映されました。そこで、この2話について少し触れてみます。

【第5話】

ここでは、拒絶理由通知への対応でした。ご存じのように特許出願では、進歩性なしが圧倒的に多いのですが、記載不備を使うことになりました。そこでプロデューサーから特許出願の審査のシーンを撮影したいのですが…、と言われ、それなら特許庁を撮影させてもらったら、とコメントしました。特許庁は汐留の日テレのビルから目と鼻の先なので、簡単に行けますので。そうしたら、特許庁はとても親切で、審査の部屋や審判廷なんかを案内してもらい、うまく撮影できたようでした。

その中で、特許庁の玄関前でなかなか面接に応じしてくれない審査官の前に、突然亜季が現れるシーンがありますが、これは最初、特許庁の廊下で突然審査官の前に現れることになっていました。しかし亜季がアポなしに特許庁に入れるわけがなく、私が玄関前で待ち伏せすることにしたらと提案してこのようになりました。

また審査官の面接では、審査官が最初高圧的な態度で亜季に接することになっていたのですが、それではユーザーフレンドリーを標榜している特許庁の対応と乖離するのではないかと思い、できるだけ優しく接するように指示しました。

しかし、脚本家やプロデューサーは審査官と出願人の激しいやり取りを想定していたようで、なんとかそれを生

かしたい、とのことでした。そこで、亜季と北脇との面接の練習のシーンを作ったのです。

審査官との面接のシーンでは、最後に審査官が補正後の明細書をほめるシーンがあるのですが、さすがにそれは無いと思いましたが。また、審査官に甘酒を飲んでもらうシーンについては、元審査官であった知人弁理士にそのアイデアを聞いて追加したものです。

また、商標「ふてぶてりリイ」について無効審判で審判廷が出てくるシーンがありますが、被請求人が欠席でした。このような場合、通常、被請求人は答弁書を提出しないので、口頭審理は最初から開かれません。そうすると、北脇や根岸ゆみを審判廷で撮影することができません。そこで、被請求人は、一応答弁書は出したが欠席したという体裁にしました。

【第6話】

大学との共同研究がテーマで、私自身も企業に在籍している間に何度も経験しました。ここではよくある学会発表と特許出願のせめぎ合いが問題となりました。

話は変わりますが、最初の原稿では、研究費用の負担が大学と企業が折半なのでその特許を受ける権利の帰属がややこしくなる、と言う感じだったのですが、私の知っている範囲では、大学側が研究費用の一部でも出すということは事実上ないので、月夜野ドリンクが研究費用を全額負担するという設定にしてもらいました。

また、当初は大学側が学会発表をしてしまったらもう特許は取れないというストーリーになっていたのですが、テレビを見て頂く一般視聴者の方々に新規性喪失の例外規定を知っててもらいたいと思いました。そこで、この規定について北脇が事務所の白板に説明する図を書いているのですが、ドラマの流れから、特にこれについては明確なセリフが出てきませんでしたので、一般の視聴者に完全に理解してもらうことは難しかったかも知れません。

またここでは国内優先制度を使うことも考えたのですが、これを入れると一般の視聴者にはこの制度の内容を説明しなければならなくなり、やはりドラマにはそぐわない事になると考えました。

更に官能評価がクローズアップされていますが、この手法は味や匂いなど客観的に数値化が困難なものについてなされるもので、全特許出願中の官能評価に関する出願は極めて少ないものと思われませんが、このようなものがあるということ皆さんに知って頂くことは悪いことではないと思っています。

以上



本物と見まごう生田スタジオのセットにて